

第4回 KYOTO KAKIMOTO 恋文大賞[®]

文章(手紙・作文)部門 <一般の部>

「愛するニッキーへ」

いつも時折思い出す。私が小学生の頃、家の近くで子犬が生まれた話を母が聞きつけ、急いで私は自転車の後ろにまたがり母と子犬を見に行った。

クリーム色の柴犬は臆病に近寄ってきて、まるで待っていたかのようにピタッとくっついてきたのだ。

兄弟は皆引き取られ最後の一匹だった。名前はニッキーとつけて、いつも私達の側にいてくれた。

散歩が大好きだけどたまに脱走して庭からいなくなる事も多く、

近所の人が「ミッキーが神社にいた」とか、「公園にすわっていた」とか、本当に世話の焼ける子だったことを覚えている。

でも父の言う事だけはよく聞く頭のいい柴犬特有の誠実さは持ち合わせていた。

13年たち、急に体調が悪くなったミッキーは、病院で家族に見守られながら一言、

「ワン」と叫んで静かに目を閉じた。

きっと「ありがとう」と言っていたに違いない。

その日は一番可愛がっていた父がトイレで大声で泣いていた。

父が泣く声は初めて聞いた。愛情の深さが響いていた……。

そして私は、まるでお昼寝をしているかのごとく幸せな顔をしているミッキーを優しく抱きしめてさようならを言った。

それから10年、今でも庭を見るとミッキーが歩いていた様な、

こっちを見ている様な。

もしかしたらまた脱走を試みているのかもしれないと思う時がある。

その時は心の中で「ミッキー」と話しかけると自然と目頭が熱くなってしまう。

私も年を取った証拠だなんて母は笑って言うけれど、

一番愛していた父のパソコンアドレスは「mickydog」 本物の愛情である。